

4・父の死

高森町高森中学校北部校一年 T・T

忘れようとしても一生忘れられない出来事であった。

六月二十七日。僕達が学校にいるうち放送で、

「大雨になりそうだから、部落ごとにならんで帰ってください。」と言った。

帰りに田沢川の水はゴーゴーと恐ろしい音をたてて流れ、植えたばかりの青い田からは茶色の水がどうどうと流れ、苗は横たおしになっていた。

家に帰ったらお姉さんとおかあさんとおとうさんは、田んぼが流れるので防ぎにいつて、るすだった。有線放送ではたえずきんきゅうお知らせをしていた。川があふれたとか、山がくずれたり家がつぶれたとかいうことばかりだった。夕方ものすごい音がした。すこしたつとお姉さんが青くなって帰って来た。話しによるとものすごい音とともに大水がおそいかかり必死になって逃げた。振り返って見ると田んぼはみずうみみたいで、僕のおとうさんやおかあさんの姿は見えなかったという。

その夜は電気は消え恐ろしいのと悲しいのとで眠れなかった。つぎの朝早く田沢川で女の人が助けを呼んでいる。別家のおばさんらしいといっていた。助けに行つて見たら、おかあさんと、連絡があつたが、橋が落ちて、くることができなないので、おかあさんは松川の病院へ入院した。おかあさんが助かつて僕達はほつとした。つぎつぎに亡くなった人があげられた。僕のおとうさんもその中の一人であつた。この洪水で田沢川は見るかげもなく白い河原となり十人の大切な命がにくい洪水のためにうばわれてしまった。

今では災害でいためつけられた所も、町内や県の人達が全力をあげて復旧に努力し、石と砂ばかりだった田んぼもダンプカーで赤土をはこんでだんだん良い田になってきている。

今年も半分以上は出来あがり稲がみのつたが、僕の家では約五反歩の田んぼが全部流失してしまった。その上今年の春は長雨がつづき、今年も田植をすることができなくて残念だった。この工事が一日も早く終つて稲のみのるのをまつている。又大水が出てもしぶくもしぶくないじょうぶなものになってほしい。

おかあさんも百日の病院生活をしたが今では丈夫になり、僕達のために一生懸命働いている。僕は男三人兄弟だ。いくらおとうさんのことを思つても死んでしまった人はかえらない。家族みんなで力を合せてがんばらなくてはならないと思う。

楽しい時には家中が楽しみ、悲しいことがあつてもふへいをいわずにながまんをするのだ。

来年は田植も出来る予定だ。僕は農業高校を卒業したら、お母さんと一生懸命に農業をやるつもりでいる。

(三十八年)